

出版100周年 シニアこそ読もう『赤毛のアン』

「エッ！ いい年をしたオジサンが少女物語の舞台を訪ねるの？」——口にこそ出さなくても、我が“悪友”たちは心の中でこう思っているかもしれません。私自身、最初はちょっとした気恥ずかしさも抱いていたのですが、それは今をときめく脳科学者・茂木健一郎教授のアン番組出演で消え去ったのです。

本年3月、『赤毛のアン』100周年を記念する特集がNHKで組まれました。番組の中で氏が言ったのです。「若い時からアンのファンだった。でも、男が読んでいるとからかわれるので、自分は隠して読んでいた」そして「古典は何度読んでも新しい発見がある」と。自信をもって取材準備を始めました。

まずは作品の原書に挑み、NHKのアンについての英語番組を視聴、ミュージカルも鑑賞しました。さらに、日本で最初の村岡花子訳と直近の松本侑子訳を読み比べ、松本侑子が東京・青山で直接担当した「原書で読む赤毛のアン」講座にも出席したのです。



6月半ば、カナダのプリンスエドワード島に飛びました。グリーンゲールズのりんごの花がちょうど満開。孤児院にいたアンが初めてグリーンゲールズに着いたのも6月、りんごの花が白く咲きあふれていたころでした。一人で置き去りにされた鉄道駅から、マシューが手綱をとる馬車でやってきたのです。

ハウスには各国からの見学者が押しかけていました。地元カナダの各地、お隣のアメリカから。ヨーロッパは主に東欧の国々。アジアは日本、中国、韓国が多いという。日本からは若い女性と中年の婦人が目立っていました。

島に着いた翌々日からは、物語の舞台の本場でのミュージカル公演が始まりました。毎年、夏になると催されてきた公演は今年で44回目。ガラ公演に先立って、全キャストが揃ってのサイン会と記者会見が行われました。私は前日のプレ公演の感想と日本での“アンブーム”を伝えた後、主役のアン、準主役のマシューにインタビューしたのです。

アン（アミー・ワリス）：「記念すべき年の主役をいただいて光栄です。おしゃべりでチャーミング。そして勇気もある。どこまでも希望を失わないアンは、永遠に私たちの“生き方の鏡”だと思います」

マシュー（サンディ・ウィンスビー）：「高齢になるにつれて、身体だけでなく心まで枯

れてしまう人も多い。年を取るほどにアンのような『心のみずみずしさ』が必要になってくる。作品は少女たちだけでなく、すべての大人に通ずることを訴えたい」

サインが終わると私は可愛い美人のアンと並んでカメラにおさまりました。私が差し出した原書の表紙裏にハートマークをつけて書き込んだ彼女の言葉は：

“To Takeshi: Much love, Anne Shirley, Amy Wallis”（武さんへ：心からの愛をこめて——アン・シャーリー<アミー・ワリス>より）でした。

日本、カナダ、どちらの公演でも、アン役の歌唱力、おどおどし口下手なマシュー役の演技が際立っていました。アンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常、人間の情愛の深さ。マシューが亡くなり、アンが大学進学を断念、マリラを支え、再び自分の道を切り開いていこうとする最終幕は、観客の誰もが涙を誘われ、感動を禁じえません。

島をめぐる旅のなかで車椅子の日本婦人に会いました。Kさん。宮崎から羽田、成田、トロントの空港を経由して州都シャーロットタウンへ。60歳の誕生日を祝い、娘二人が旅をプレゼントしてくれたのだといいます。リウマチで足が悪く、娘の一人が付き添って人生で初めてとなる海外旅行でした。

「車椅子で大変だと思いましたが、カナダに着いてみると、障害者にみんなとても親切で感動しました。アンは40年前に村岡さんの訳で読んで以来、その舞台を訪ねるのが夢でした。アン・シリーズも全部読みました。プリンスエドワード島は、牧歌的な広々とした光景で心が洗われる思いです。空気も澄んでいて、持病のリウマチもあまり気にならなかった。何があってもくじけないアンの生き方は、40年来の自分の支えでもありました。送り出してくれた娘たちに、親切に面倒を見てくださったカナダの皆さんに心から感謝しています」

夢を抱いて努力していれば、いつかは実現できる。アンが教えてくれた一つの例のような気がします。マシューの言うとおり、歳を重ねるにつれて夢を失い、身体だけでなく、心まで枯れてしまう人も多い。歳をとるほどにアンのような心のみずみずしさを！シニアになって読む、または読み直すところに、自らの心の若返りもあると実感しているところです。シニアこそ読もう『赤毛のアン』！！



#### その導入として「物語のあらすじ」を紹介します

——時は19世紀末。所はカナダの北部東海岸にあるプリンスエドワード州。島のアブォンリー村（実際にはキャベンディッシュ村）にグリーンゲールズという家があった。グリ

ーンゲーブルズとは「緑の切妻屋根」の意。

家には 60 代のマシュー・カスバートと 50 代のマリラ・カスバートという独身の兄妹が暮らしていた。子どものいない二人は、年老いてくるマシューの農作業の手伝いのために、孤児院から男の子を引き取ろうと考えた。ところが、手違いでやってきたのは赤毛でそばかすだらけのやせっぽっちの女の子だった。

アン・シャーリー。11 歳。

マリラは女の子は農作業の役に立たないと追い返そうと考える。ところが、アンの生き生きとした明るさ、可愛いおしゃべりにまずマシューがとりこになり、ほどなくマリラも彼女の生い立ちに同情、不思議な個性に魅せられ、引き取って育てることになった。

アンは島の美しい自然とマシューとマリラの愛情のなかですこやかに育っていく。学校では同級生のダイアナとの間に友情を培い、赤毛をからかわれた男子生徒のギルバートと反目。担任教師、牧師夫妻、そして周囲の多くの大人たちからの感化で、彼女は優しく賢い 16 歳の娘へと成長していった。

半面、それまで世間づきあいが苦手な、兄妹だけでさびしく生きてきたマシューとマリラも、アンを育てていくなかで、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って大きく変化、心豊かな大人へと成長していくのである。

美しいものに憧れる乙女心。数え切れない失敗。それでも“想像力”を駆使し、決して希望を失わず、すべてに前向きに生きていくアンに読者は感動し勇気づけられる――

<プリンスエドワード島の写真は「名作の舞台を訪ねて」のアルバムで紹介していますのでご覧ください>